

# 都市における親子関係

三 浦 武

東京都立大学

都 市 研 究 委 員 会

1971. 2

# 目 次

序 論 .....	1 頁
親子関係の研究法 .....	1 頁
P. C. R. T. の標準化 .....	3 頁
P. C. R. T. と Y. G. との関係 .....	6 頁
東京の親と鹿児島県の親のしつけ態度の比較 .....	8 頁
団地っ子の親子関係 .....	10 頁
多摩ニュータウン計画への感想 .....	15 頁
都市研究の課題 .....	16 頁
参考文献 .....	17 頁

## 序 論

私は「都市研究」の中で、「都市における親子関係」をテーマとして研究してきた。それは私たちが昭和32年以來行ってきた「児童の教育的環境の診断のための家族関係測定法」の研究、「年少者健全育成のための、効果的人間関係の形成」の研究、「児童の発達に即応した望ましい親子関係の基準に関する研究」などの延長として、「都市における親子関係」をさらに追及したかったからである。

### 親子関係の研究法

さて、親子関係を規定しているものは実にいろいろある。思想的なものもあるし、法律もある。経済的条件も関係している。住宅事情もある。また、一方、ある親子関係があると、そこから、家族はそれぞれにいろいろな影響を受ける。殊に子どもの人格の形成に及ぼす親子関係の影響は大きい。それについては、今日までに、いろいろな学者の研究がある。サイモンズ (Symonds, P.M.) は、親子関係を規定する基本的な要因として次の二つのものが認められると云っている。

- (1) 子どもを受け入れて、愛してやるか、子どもに愛情を与えることを拒むか。
- (2) 子どもを親の思うままに支配しようとするか、親が子どもの要求に服従するか。

そこから、無視、残忍、溺愛、放任などの問題の親子関係が考えられる。シエファー (Schaefer, E.S.) も因子分析に基づいて、母親が子どもに対する行動を、愛情——敵意、統制——自律 という二つの次元でまとめている。ベッカー (Becker) はやはり因子分析によって、暖かさ——敵意、制限——許容、不安、情動的——冷静な分離の三つの次元を考えた。

親子関係は人間形成に重大な関係をもっていることはまちがいないと思

う。しかし、どのような親子関係であると、どのような人格が形成されるかは、必ずしもまだよくわかってはいない。

従来この点については、いろいろな学者の、いろいろな考察はある。しかしそれは思弁的考察であることが多い。日常生活の経験に基づいたり、いろいろのcase-studyから、一応の考察をすることはできる。しかし、そうして作られた躰の方針は、人によってさまざまである。一方では「叱らない教育」を唱えるニールや霜田静志氏などの人たちがいるかと思うと、他方にはスパルタ教育や規律の教育を唱える人たちもいるといった具合である。（ソ連の幼児教育ではきびしい態度が強調されている。）

しかし親子関係は実に複雑微妙で、外見的には同じ親子関係が全く違った影響を与えていることもある。親の放任的態度が、子どもがしっかりしているから放任していることもあるし、教育的無関心からくる放任であることもある。そこでわれわれの立場は、まず既成の意見を去り、フランクな立場で親子関係を見直したいということである。

われわれは都市における親子関係の実態を知りたいと思った。そのためには親子関係の実態を調査する方法をもたなくてはならない。親子関係を調べる方法としては、従来は質問紙法、面接法、文章完成法、投影法（CATやTATの一部の、親子関係の場面が描かれている図版を使う）などが考えられる。しかしテストの形でまとまっているものはまだ少ない。品川不二郎夫妻の田研式親子関係診断テスト、同じく品川教授などの両親意見診断検査、林勝造氏などの作製したCOPテストなどがわが国では使われている。

親子関係は子どもの年齢によって違ってくる。子どもの性によっても違う。出生順位によっても違う。したがって親子関係診断テストも子どもの年齢により、父と子の関係なのか、母と子の関係なのかによっても別種のテストがなくてはならない。（この点はわれわれの因子分析的研究の結果でわかった。文献（8）参照。）さらにはそのテストの標準化が行な

われた時代の風潮によっても規定されてしまう。すなわち、世の中の風潮が変れば、前のテストではもううまく測定できなくなるであろう。したがって国が違い、民族が異れば標準化を別にしなくてはならないと思う。品川教授の「親子関係診断テスト」はそういう区別や配慮をしていない点で不満足なものである。因子分析もやっていない。しかも作製されてから既に十年以上を経て、テストの背景にある親子関係の社会的実情も変わっていると考えられる。そこでわれわれが新しく親子関係診断テストを作製しなくてはならないということになった。

### P.C.R.T. の標準化

われわれの作製した親子関係の調査用紙をP C R Tとよぶ。A Test for Parent-child Relationship という意味である。

昭和36年にわれわれが親子関係の因子分析的研究を行った。その時出てきた親子関係の因子は下記の四つであった。(文献9参照)

- (1) 細部関与の因子
- (2) 垂直的親愛の因子
- (3) 情動の因子
- (4) 水平的親和の因子

この四因子の質問項目をいろいろの点から再吟味して、親子関係診断のための標準テストを作る作業を昭和44年から昭和45年にかけて行なった。調査対象は小学校2年、4年、6年生および中学校2年生で、各800人分の調査用紙を用意した。市内住宅地、団地、商業地、工業地、中小企業地、農業地、混合地、漁業地、その他の九地域に分け、それぞれの地域から1～5校を選び、合計65校に調査の実施を依頼した。データが得られたのは41校であった。コンピューターに入れて集計整理したデータは1962人分であった。今回はいろいろの配慮、考察の結果、P C R Tの四因子の名称を次のように改めた。

因子Ⅰ 過保護的態度

因子Ⅱ 寛容的態度

因子Ⅲ 感情的態度

因子Ⅳ 民主的態度

昭和36, 37年にきめた名称のものと内容的には異なるものではない。  
地域別の四因子別のデータは第1表のようになった。

この表でみられるところでは地域差はあまりないようである。私の予想では、住宅地の親子関係は接触が多く、第Ⅰ因子(細部関与)や第Ⅳ因子(水平的親和)が強く出るのではないかと思ひ、商業地、農業地では親子の接触度が少く、第Ⅲ因子(情動)が強く出るのではないかと考えられたが、その予想は裏づけられなかった。しかしこの点は、年令別、男女別、因子別にもっと細かくデータを分析して、さらに検討してみたいと思っている。

昭和44年8月に電子計算機による集計整理を行ない、その後ケース・スタディなどを行って、このテストの妥当性の検討を行った。質問項目の再検討なども行ない、昭和45年6月、一応テスト作製の作業は一段落ついた。

PCRTはA型(母親に記入してもらうもの)、B型(子どもに記入してもらうもの)、C型(自分の子どもはどのように記入したであろうかを母親に推測してもらって母親に記入してもらう形式)から成っている。A型とB型のずれ、B型とC型とのずれなどが面白い資料を提供してくれるものと期待している。

第 1 表

地 域		因 子 I			因 子 II			因 子 III			因 子 IV		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
地 域 1	A. V.	20.60	20.91	20.77	43.00	43.07	43.04	44.69	45.87	45.36	24.21	25.02	24.67
市内住宅地	S. D.	3.96	4.39	4.21	5.31	5.71	5.54	6.56	6.23	6.40	3.12	3.67	3.46
地 域 2	A. V.	20.94	20.37	20.64	39.11	41.55	40.39	46.04	46.57	46.32	22.69	25.77	24.31
団 地	S. D.	3.67	3.47	3.58	4.83	4.66	4.89	7.30	5.77	6.54	3.72	4.36	4.35
地 域 3	A. V.	21.76	21.75	21.76	39.76	41.44	40.49	45.45	46.47	45.89	23.90	25.16	24.45
商 業 地	S. D.	3.66	3.57	3.62	4.97	6.34	5.66	6.39	5.38	6.00	3.85	4.59	4.23
地 域 4	A. V.	21.52	21.08	21.29	39.80	41.95	40.91	43.85	45.78	44.85	23.51	24.91	24.23
工 業 地	S. D.	3.85	3.86	3.86	5.81	6.04	6.03	5.84	5.88	5.94	4.14	4.44	4.36
地 域 5	A. V.	20.67	21.54	21.09	39.57	41.26	40.39	44.02	45.35	44.66	23.84	25.35	24.57
中小企業地	S. D.	4.61	4.25	4.46	6.61	6.31	6.52	7.59	5.69	6.77	4.57	5.12	4.90
地 域 6	A. V.	20.67	20.73	20.70	39.33	40.84	40.09	43.42	43.07	43.24	20.96	22.92	21.95
農 業 地	S. D.	4.01	3.65	3.83	6.29	5.48	5.94	6.44	5.97	6.21	4.44	4.29	4.47
地 域 9	A. V.	20.83	21.85	21.24	39.41	41.20	40.14	44.10	47.80	45.61	22.76	23.65	23.12
漁 業 地	S. D.	4.33	3.77	4.14	6.33	5.21	5.96	6.15	5.89	6.31	3.62	4.57	4.06

## P.C.R.T. と Y.G. との関係

P.C.R.T.の妥当性をしらべる一つの資料とするためにY.G.テスト(矢田部ギルフォード性格検査)との関連を調べた。

実施期日：昭和45年6月23日～29日

被験者：東京都北多摩郡K小学校、2年(男・女)172人、5年(男・女)163人

手続：小学生にP.C.R.T.のA型およびY.G.テストを実施し、その母親にP.C.R.T.のB型およびC型を実施した。

整理：P.C.R.T.の結果は四因子別および総点を出した。(A-B)(A-C)も算出した。Y.G.は12因子別および類型別に集計した。そしてP.C.R.T.の結果とY.G.の結果との相関を出した。(文献4参照)

結果：

- (1) Y.G.はP.C.R.T.のA型よりはB型の方に余計相関が見られた。
- (2) Y.G.とP.C.R.T.の相関は、小学校5年生よりは2年生に対して相関のあるものが多い。母親の影響は子どもが幼い時の方が強いと考えられる。
- (3) 小学校2年生において、子どもも親も過保護の態度が強いと認知している時、子どもの性格型はB型が多い。また(A-B)あるいは(A-C)の、いわゆる親子のずれが大きく、いずれも子どもの方が親よりも過保護だと認知している場合にも性格型はB型が多い。一方過保護の態度が普通あるいは弱い場合の子どもの性格型はA型、C型、D型が多くなっている。
- (4) 5年生では全体的にA型が多く、他は大体一定しているが、やはり2年生の場合と同じく、過保護の態度が強い場合は比較的B型の性格が多い。そしてP.C.R.T.の(A-B)，(A-C)のずれにおいても、子どもが強く過保護だと感じている場合にはB型の性格が多く見られる。



- (5) 一般に親が過保護であると、子どもは利己主義で、独立心、自立心がなく、いわゆる依頼心の強い子どもになるが、本研究の結果から言うと、情緒不安定、社会的不適応で、活動的、外向的な性格の子どもになりやすいという傾向が見られた。
- (6) 2年生のデータでは、親が適度の寛容的態度を示す場合には、子どもの性格型はC型が多い。
- (7) ごほうびをくれるとか、子どもの願いや頼みを聞いてくれるとか、やさしくしてくれるなどといった、いわゆる親の立場から、子どもへの親愛を示すという態度は、子どもの性格形成にはあまり影響を与えていないようである。(Y.G.の類型との相関が低い。)
- (8) 2年生では、親の感情的態度が強い場合は、Y.G.ではA型が一番多く、次でB型が多い。すなわち、活動的、外向的な性格の子どもが多く見られる。これは親が自分の感情のままに行動するために、気性の激しい衝動的な性格の子どもになるのではないかと考えられる。
- (9) 5年生ではP.C.R.T.に関し、子どもの方が親よりも、感情的だと強く感じている場合、情緒不安定、社会的不適応、不活潑、内向的な子どもの性格が現れている。
- (10) 親の方が、子どもよりも、より民主的だと思っている場合は、Y.G.ではA型、C型が多く、情緒が安定し、消極的な性格の子どもが多い。
- (11) 民主的態度において(A-C)のずれが大きいと、消極的で、社会的不適応、情緒不安定な性格の子が多い。
- (12) 民主的態度の点の多い少いは、子どもの性格の型とは相関が少い。
- 以上のことについての数量的データは、また別の論文に詳しく書く予定である。ここではただ結論だけを摘記した。

## 東京の親と鹿児島県の親のしつけ態度の比較

先に、昭和36年に、われわれが調査用紙第3号Aを用いて行った調査結果を再吟味して、東京と鹿児島県の小学校の父母の躾態度の違いを検討してみよう。東京では新宿区西戸山小学校および北多摩郡のY小学校で調査を行い、鹿児島市では名山小学校で調査を行った。（三浦：人文学報 No 77の論文の巻末の「資料」参照）

64項目の質問について、はい はいに近い いいえに近い いいえわからない の五つの答の中の一つを選ばせるやり方であった。

父親および母親に答えてもらったものについて、75%以上の親がその五つの答の中のどれかに集中しているものがあるかを調べてみる。こういうことは本来そんなに地域差があるとは思われないのであるが、調べてみると案外差があることがわかった。

鹿児島市名山小学校のデータで75%以上に集中した質問項目は下の第2表のようであった。

第 2 表

							項目数 合 計
4 年	父	1	14	17	31		4
	母	10	14	17	28	31	5
5 年	父	8	14	25	31		4
	母	14	15	31			3

西戸山小学校のデータは次の第3表の如くであった。

第 3 表

	子ども		項目数 合 計
父の答	男	7 13	2
	女	7 39 43 59	4
母の答	男	7 51	2
	女	4 6 7 16 39 40 51 59	8
合 計			16

北多摩郡Y小学校のデータは次の第4表の如くであった。

第 4 表

			項目数 合 計
父の答	3 年	1 6 7 10 14 25 31	7
	4 年	6 7 8 11 14 20 25 31 51 55	10
母の答	3 年	6 7 10 14 20 25 31 37	8
	4 年	6 14 20 25 28 31	6
合 計			31

鹿児島の小学校では集中せず、北多摩郡Y小学校、西戸山小学校では集中した項目は次の2項目であった。

6. おかあさんは、あなたに無理な言いつけをしますか。

7. おかあさんは、あなたのいやがることを無理にさせますか。

鹿児島の方が強制的な傾向があり、東京の方が自由で、子ども中心の傾向があることがうかがえる。

鹿児島の小学校のみにあるのは次の2項目であった。

15. おかあさんは、あなたが一人でできると思うことは委せてやらせてくれますか。（「はい」に集中。）

17. おかあさんは、あなたにお小遣をくれますか。

北多摩郡Y小学校の父母は、集中して答える傾向が強い。画一的な考え方があからであろうか。

## 団地っ子の親子関係

都市における居住様式は一戸建て庭つきという形からアパート形式になってきている。わが国では昭和26年に公営住宅法ができ、昭和30年には日本住宅公団法ができ、団地がどんどん造られるようになり、「団地」という居住様式は今やかなりの規模のものになっている。こういう住居の様式はそこに住む住民の心理状態に影響を及ぼす。ことに、環境の影響を受けることの大きい幼児、児童には大きな影響があると考えられる。親子関係という一面を採り上げてみても、この「団地」に住むという条件が、子どもの人格形成に対し、良い影響にしる悪い影響にしる、さまざまな影響を与えていることが考えられる。そういう点について従来のいろいろな人の調査結果を少しまとめてみた。

(1) 団地では似た家族様式のものが近所に沢山居ることになる。年令の似た子どもが近所に沢山いることになる。したがって、遊び友達が得られやすい。そこで「一人っ子」という親子関係から発生する社会性の発育不良からは免れられやすい。

東京家政大学の心理学研究室が1961年に行った調査結果をみると、野間教育研究所の適応性診断テストの結果は、団地っ子と一般児

との比較において第5表の如くで、団地ッ子が社会適応がよいことが示された。

第 5 表

	団地ッ子	一般児
自尊心感情	6 5. 7	5 7. 3
退避的傾向	6 1. 7	5 4. 7
社会的技術	5 8. 1	5 4. 3
統 率 性	6 3. 2	5 7. 9
個人適応	6 1. 4	5 2. 4
社会適応	6 5. 9	5 4. 1

ところが一方、団地に住む大人は、「隣は何をする人ぞ」といった態度で、コミュニティを形成する意識の乏しい人が多い。その親の意識が子どもに反映して、子どもにもコミュニティ意識が育たず、社会性の乏しい子どもになっている場合もある。

また近頃は同胞数が少なくなっているということからも社会性の発育不全ということもある。同じ「団地」という外的条件から、全く反対の結果が出てくるのである。

- (2) 団地では、親が概して教養があり、教育に熱心であり、母親は家事に費す時間が比較的少なくて済むので、時間的余裕がある。そこで子どもにベッタリとくっついた母親、かまいすぎの母親が発生するおそれがある。所謂「教育ママ」である。それで、母子分離がおくれ、心理的離乳がおくれた子どもが発生する。「心理学ママ」「小児科ママ」となって弊害を及ぼすこともある。母親の側にフラストレーション恐怖症、反抗期恐怖症を発生させることがある。勝気の母親は子どもへ

の期待過剰から、子どもは負担を強く感じ、「規範性の強すぎる子」になったり（文献7） いじけた子になったりする場合がある。母親の見栄の犠牲になって、おけいこ事に行かされ、塾に通わされて、仲々した子どもらしさの育たない子になっていることもある。

しかし親の態度が合理的、理性的で、バランスのとれた親子関係になることもある。松原慶太郎氏の小学校5年生の団地っ子の調査によれば、適応性良好で、民主的態度をとり、西洋的心性をもっていることがわかった。（文献19）

- (3) 団地では親が自分の子どもを見る時、よその子と比較することができ。親は兎角自分の子どもだけ見て考えがちで、そこから所謂「親馬鹿」という弊害が発生する。団地に住むとそういう弊害から免れられやすい。
- (4) 団地の家庭は、空間が限られているので、核家族になることが多い。祖父母が家族の中に混入しないので、親の躾の方針がそのまま子どもに伝えられて、躾の方針に一貫性を保つことができることは良いことである。裏表のある子、親の顔色を見る子が発生するおそれが少い。しかし一方、老人の居る家庭からくる良さが無い。伝統的価値、家族主義のよさに欠ける点がある。
- (5) 団地っ子は共働きの父母をもつことが多い。そうすると、母親からあまり手をかけられないので、自主的な子になる傾向がある。しかしその反面、いわゆる「鍵っ子」の弊害をもちやすい。世故にたけて、生活の汚れに染った「小型の大人」になるおそれがある。留守番の代償として与えられる小遣が非行化につながりやすい。
- (6) 団地っ子は神経質で、たくまさが足りない。もやしっ子である。バネがきかない子である。知能は高いが、がんばりがきかない。運動機能の発達がおくれる。最近では肥満児の問題も出てきた。これは、団地という、鉄とコンクリートで出来上がった非常に人工的な生活環境が

もたらした結果である。自然のままの遊び場が少ないので、独創性が育たない。実用一点張りの建築様式が多いから、うるおいのある心も育たない。

子どもたちは思い切り動き廻ることができない。ことに雨の日には、狭い団地の部屋に閉じこもり、隣り近所への騒音を気にする母親に、おとなしくする様に躰けられていれば、フラストレーションが内攻して、妹いじめなども出てくる。

最後に、団地ッ子をたくましさを不足にする原因の一つには、団地の親の教育観における強さの欠如、教育における信念の欠如なども関係があるであろう。

以上で団地ッ子の親子関係を概観したが、なお、団地ッ子についての心理学的研究の幾つかについて追記しておく。

釘宮冴子と守屋光雄は、大阪府下の団地居住者を、その住宅形態によって、賃貸アパート、テラスハウス、社宅、分譲地に層化した。（文献15, 16） 母親45名に面接し、育児の実態や、育児の態度などを調査し、一般的に躰の開始は賃貸アパートがもっとも早いことなどを見出した。幼児の社会性の発達をテストと観察で測定したが、団地の幼児がすぐれているという結果は得られなかった。

岩城富美子教授（西南学院大学）も団地の幼児の社会性の発達を調査した。（文献17, 18） 岩城は幼稚園での生活記録の映画を見せ、それについて集団討議を行い、その際の言語行動を指標に、幼児の社会性を測定した。その結果、団地の幼児は一般住宅の幼児にくらべ、社会性が発達していることを示した。

また岩城は、幼児に課題を与え、共同作業中の行動観察によって、団地の幼児の性格を追及している。

中西信男等は大阪府下の団地とその周辺一般住宅に住む9才～11才の児童234名を対象に余暇活動を調査し、その母親に子どもの生活時間

を記入させた。(文献20)

その結果、子どもの一日の生活時間の分配は団地と一般住宅とでは大差がない。ただ勉強時間が、団地では夕飯後から午後8時までに頂点があり、一般住宅ではそれが午後5時ごろになっている。余暇活動でも明確な差はないが、団地では「雑誌・漫画を読む」が少ないなどの点を明らかにした。

小林皓子などは質問紙法と面接法によって団地生活の特性を考察し(文献21) 多勢豊次などと小林浩夫などはそれぞれ社宅と母子寮について、同一の方法によって比較している。高桑康雄などは東京の三つの団地と、それと経済的レベルが同一と考えられる商住地区の小学校5年生500名に質問紙調査を行って、学校生活の状況や学校への意見を調べ、団地児童の特徴をつかもうとした。(文献22) しかし結果は学校差が目立っただけで、団地児童に共通な特徴はつかみ得なかった。

西尾・大野などは団地っ子の生活と性格の特徴をとらえようとしている。団地児童と非団地児童(小学校4～6年, 360名)との比較を、父母の職業、学歴から子どもの生活時間、環境、学校行事に対する興味、「1000円もらったらどうしますか」「どういう人柄の人になりたいですか」などにまで亘って行った。

天野などは相模原市の農村地帯、商業、住宅を中心とした中間地帯、団地を中心とした新興地帯の三地域の間、教育についての意識構造においてずれがあるか否かを研究した。結果として、地域差はそれ程明瞭には現われず、年齢別、職業別、学歴別、子どもの有無などの要因が利いたようであった。

団地は近代家庭の典型として注目され、社会学的な資料はかなり豊富であるが、心理学的資料はまだ少い。単に団地に住んでいるものといない者との比較をするという原始的な研究方法自体にも問題がある。

われわれのPCR Tを使って、団地っ子の親子関係の研究をするのも今後に残された課題の一つである。



## 多摩ニュータウン計画への感想

昭和45年2月27日、この都市研究の会が主宰して多摩ニュータウンの見学をした時、私もそれに参加した。私は団地が人間形成に与える影響という面で関心をもっている。

多摩ニュータウンの計画は東京がかかえる住宅問題解決のエースとして登場した。903万坪の土地に昭和52年までに近代的アパート群を建て人口40万人の新都市を造成するのである。

ここを23の住区に分ける。一住区は4000戸～5000戸で、人口15000人を予定している。一住区に一つの中学校、二つの小学校、三つの幼稚園を造ることになっている。文部省で昭和39年度から始めた「幼稚園拡充整備七ヶ年計画」では人口1万人につき幼稚園一つを造るということであったが、この多摩ニュータウン計画の方が2倍も多く幼稚園を造ることになっている。事業決定区域内には小学校が52校できる。周辺の区画整理地区を入れると62校も造ることになっている。中学校も23校造る。一つの学校を造るのに、土地代金1億5000万円、校舎建築費に1億5000万円という見積りという。しかしその負担が地元の市町村には過重なことから、学校用地は無償で地元の市や町に貸し付けることに話がついたという。しかしそれは義務教育の学校に関してだけである。幼稚園は公立は造らない方針なので、すべて私立の幼稚園を誘致することになっており、私学協会を通じて呼びかけているが、土地を無償で貸与するようなことは幼稚園については考えられていない。大規模な都市計画の一環でありながら、幼稚園に関しては本格的に取り組んでいないことがうかがえる。このままだと、比較的小規模な幼稚園ができるおそれが大きい。既に出来ている一つの幼稚園を見ると、木造平屋建てで、園庭もさして狭くない。

道路計画、下水道計画などはかなり大規模なものであるが、教育施設に関してはどうも規模が小さい。

前述の如く団地ッ子が神経質で、たくましが足りないなどの実情がいろいろの研究で示されている。そういう欠点の発生を防ぐためにもニュータウン計画の中に、そこが人間形成の場となるのだという考えのもとに、従来の規模よりはずっと大型の教育施設を考えてもらいたいものである。幼児や児童が思い切りとび廻れる場所を用意してほしい。

また、ニュータウン計画で造成されている土地をみると、ブルドーザーで平坦にされた一面の赤土の原野である。もとは緑の豊かな土地であったのに、一木一草もない赤土の原になっている。もっと、所々に緑の土地を残した余裕のある都市計画はできないものであろうか。

## 都市研究の課題

都市はさまざまな問題をかかえている。その中で、私の立場からの今後の都市研究の課題を考えてみよう。

大都市に集った人々は群衆の中の孤独感を味っている。近代化された仕事は細分化された作業となり、「生き甲斐」の感じられないものとなり、社会という大きな機構の歯車の一部品化されている感じとなってきた。疎外感である。こういう意味の精神的公害から免れて、人間味のある生活を取り戻すにはどうしたらよいか。

その一つの方法はコミュニティの復活であろう。そして、その前にまず健全なる家庭生活の回復が必要である。アパート化した家庭生活、家族がバラバラになっている家庭生活から、安定感をはぐくむ場としての家庭を復活させなくてはならない。

その家庭の機能の一つとしての親子関係について、それはどういう形にもっていくべきかを大いに考える必要がある。

青少年非行化の原因もその8割までは家庭環境にあるという調査があった。

しかしその家庭の機能をうまく果すための要件としては、住宅の広さな

どの物理的側面から招来させられるものもたしかにある。アメリカのように、幼児子どもでも自分の部屋をもっているような所では自立の精神は早くから育っていく。父母が仲が悪くて、しょっちゅう言い争っているのをすぐ横で聞いているより仕方のないような狭い住居では、子どもは家からとび出して行きたくなるのを抑えるわけにはいかない。

しかし、親の養育態度や、青年の親に対する構えの形成には、心理学的になし得る面がなおいちいろあると思う。そのためには、家庭生活、親子関係の実態を細かく調査し、いろいろの条件分析を行って、どうすればどうなるかについての確実な根拠を少しでも多くつかまなくてはならない。こう考えると心理学の面から都市問題ととり組むべき問題はなお多いと思われる。

今思いつく具体的研究テーマを列挙すると、

- (1) 都市と農村の親子関係を比較する。住宅地域、中小商工業地域、スラム街などの親子関係を比較する。
- (2) 子どもの年齢別に親子関係がどうなっているかを見る。親子関係を発達の観点から考察する。
- (3) 戦前の親子関係と現代の親子関係を比較する。
- (4) 外国の親子関係と比較する。
- (5) 非行青少年の親子関係を分析する。

## 参 考 文 献

1. 三浦 武：親子関係診断検査の作製。人文学報 77 昭和45年3月
2. 三浦 武：親の養育態度と子どもの人格形成。「幼児の教育」58巻11号、昭和34年11月
3. 三浦 武：団地、社宅の子のプラスとマイナス、「これからの家庭教育」39号、昭和42年11月

4. 三浦 武：親子関係と子どもの性格、人文学報（印刷中） 昭和46年3月
5. 三浦 武：親子の接触と子どもの人格との関係、人文学報47 昭和40年3月
6. 三浦 武：親のストレスと子どものストレス、「児童心理」 19巻11号、昭和40年11月
7. 三浦 武：規範性の強すぎる子ども、「児童心理」22巻3号、昭和43年3月
8. 島田俊秀他6名：父—母—子関係の分析（12）—— 父子関係の因子—— 日本応用心理学会第31回大会発表論文集、昭和39年
9. 八重島建二他4名：父—母—子関係の分析（7）—— 母子関係の因子—— 日本心理学会第26回大会発表論文集、昭和37年
10. 品川不二郎、品川孝子：田研式親子関係診断テストの手引、日本文化科学社
11. 品川不二郎、宮本 実、森上史朗：TK式両親意見診断検査、田研出版KK.
12. 林 勝造、一谷 彊、小嶋秀夫：CCP解説、大成出版社牧野書房、昭和38年7月
13. 岡本重雄（編）：家庭心理学、朝倉書店、昭和40年
14. 牛島義友：家族関係の心理、金子書房、昭和30年
15. 釘宮冴子、守屋光雄：団地乳幼児のパーソナリティ発達 —— とくにその社会性の発達について、教育心理学会第4回総会発表論文集、昭和37年
16. 守屋光雄、釘宮冴子：団地における親の育児態度と幼児の personality の発達に関する一研究、日本保育学会第16回大会発表抄録、昭和38年
17. 岩城富美子：言語行動を手掛りとして見た団地幼児の社会性の発達— 団地研究第2報告、教育心理学会第4回総会発表論文集、昭和37年

18. 岩城富美子：団地幼児の人格発達 —— 依存と援助の行動を手掛りとして、教育心理学会第5回総会発表論文集、昭和38年
19. 松原慶太郎、沢井幸樹、仲原晶子：団地児童の生活に関する一調査、応用心理学会第29回大会発表論文集、昭和37年
20. 中西信男、橘 覚勝、小花和昭介：団地児童の社会性に関する研究(1) —— その生活時間と余暇活動について、日本心理学会第26回大会発表論文集、昭和37年
21. 小林皓子、森脇 要、松平俊子、小林治夫、多勢豊次、穂積 翠：母親の生活構造の態に及ぼす影響について —— (1) 団地生活 (2) 社宅 (3) 母子寮 日本心理学会第27回大会発表論文集、昭和38年
22. 高桑康雄、小池栄一：団地児童の学校生活、教育心理学会第7回総会発表論文集、昭和40年
23. 生活科学調査会：団地のすべて、医歯薬出版、昭和38年
24. 橋爪貞雄：変わりゆく家庭と教育、黎明書房、昭和37年
25. 日本住宅公団建築部調査研究課(岡部慶三、藤永 保)：アパート団地居住者の社会心理学的研究、Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ 昭和35年、昭和38年
26. 国立社会教育研究所(二宮徳馬)：団地族の意識調査、昭和42年9月

昭和46年2月25日 印刷

規格表第2類

昭和46年2月27日 発行

登録第148号

## 都市研究報告 第 9 号

編集・発行 東京都立大学都市研究委員会

代表者 中 野 尊 正

東京都目黒区八雲 1 ~ 1 ~ 1